



高橋誠一先生のご逝去を悼んで

その他のタイトル	The Late Professor Emeritus TAKAHASHI Seiichi
著者	伊東 理
雑誌名	史泉
巻	120
ページ	1-3
発行年	2014-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023638

高橋誠一先生のご逝去を悼んで

伊 東 理

高橋誠一教授（関西大学名誉教授）が二〇一四年二月十一日、肝不全のため、入院先の奈良県立医大附属病院でご逝去された。享年六八歳。前年に関西大学をご退職され、その後も特別契約教授としてご勤務いただいていた。一九九八年肝臓腫瘍の入院治療以来、定期的に検査、処置のため入院されてきたが、大学ではいつもお元気な姿で教育、研究にご活躍いただいた。昨年十月に入院されたが、今回も単なる定期検査・処置のためのご入院と思っていたが、遂にお別れしなければならなくなった。それにしても早すぎるご逝去はただただ無念である。

高橋先生は一九四五年に奈良市でお生れになった。小学生のころには、すでに考古学、古代史に関心をもたれていた。イギリスの歴史学者A・J・トインビー博士が、奈良県訪問の折には、こうした高橋少年の将来の活躍を予見されていたのか、その頭をなでられたそうである（先生のご自慢話の一つ）。そして奈良学芸大学附属中学校、奈良女子大学文学部附属高校を経て、六五年に京都大学文学部に入学され、歴史地理学の巨星であり先生の恩師である藤岡謙二郎先生の影響を受けられ、学部、大学院と歴史地理学の道に進まれることとなった。

学生・院生時代には日本古代の山城（『人文地理』、第二四巻五号、一九七二）、古代の手工業（『史林』、第五四巻第五号、一九七二）などについて研究されたことを始めに、その後日本および東アジアの都城、古代遺跡などに関するご研究で多数の成果を公にされることとなった。一九七三年に博士課程を中退して京都大学文学部地理学講座の助手となられ、七六年には滋賀大学教育学部に着任され、講師・助教授・教授として十七年間に職された。九三年には矢守一彦先生の死去による歴史地理学分野の後任として関西大学文学部に着任され、爾来十九年間教育、研究にあたられた。

一九九五年には、学生時代以来ご研究されてきた古代日本都市の歴史地理学研究をまとめられて、関西大学に学位論文を提出された（『日本古代都市研究』、古今書院、一九九四）。その後先生は、琉球の都市・村落の研究に没頭されることとなる。新たな研究分野への



転身は、〇三年のご著書でも語られているように、九八年の入院でご自身の命に限りあること悟られ、子命をお好きなワールドの調査に専念する決心をなさったことを契機としている。肝臓の検査・治療を繰り返しながら、一年に数回のペースで琉球列島に通われてきた。「死を覚悟すると、時間を無駄にせずに、できるだけやりたいことをしたい、と思うようになるものや」といったお話を幾度となく先生からお聞きしたが、お言葉通りのハイペースで琉球研究を進められ、それらの成果は二冊の大著にまとめられた（『琉球の都市と村落』、関西大学出版部、二〇〇三『第五回人文地理学会 学会賞受賞』、『日本と琉球の歴史景観と地理思想』、関西大学出版部、二〇一二）。

研究フィールドの変化はあったが、高橋先生のご研究分野は、全体として東アジアの歴史的景観の復原、さらには都市、村落のプランや景観形成の解明などに関する歴史地理学研究に位置づけられる。そのなかにあつて、実際のご研究では、東アジア世界の歴史的都市・村落の特質や系譜などを常に意識されながら、道路、遺構等の緻密な計測や地元の方からの聞き取り調査等の地道なフィールドワークと地籍図・空中写真等の分析などによって、極めて精緻な実証研究を積み重ねられてこられた。先生の一連のご研究は、先生独自の研究世界を切り拓いてこられたものとして高く評価されている。

学内にあつては、関西大学に就任されてほどなく、大学自己評価・自己点検副委員長、教養部長などを歴任されたが、発病後は要職への着任要請をすべてお断りになり、教育、研究に専念されることとなった。なかでもアジア文化交流研究センター研究員、グローバルCOEプログラム・東アジア文化交流学教育研究拠点事業推進担当者等を務められ、関西大学の東アジア文化の教育・研究の推進に

積極的に協力されてきたことは特筆に値する。

「二期一会を大切にしたい」というのが先生の口癖・モットーの一つであった。さまざまなお会いや気さくな会話を楽しまれて交遊関係を広げられてきたので、先生の友人・知人の数には驚くべきものがある。また高橋先生は、名口調の講義とご人徳などから、多くの学生を魅了してきた。先生ご自身も授業が大好きであると言われていたが、実際に教壇に立たれた時が一番楽しそうであった。学生とのコンパでは、いつのまにか先生を中心に学生の輪ができるのが常であったし、学部学生には朗らかで楽しく頼りがいのある先生として慕う学生も多かった。その一方で大学院生には、「地理のプロとしての自覚と実力」を備えさせることが先生の使命であるとして、かなり厳しいゼミ指導をされてきたし、叱られる学生も少なくなかった。先生は学生の個性を尊重しつつ、臨機応変に学生を導かれた希代の教育者であった。滋賀大学、関西大学を通じて先生の影響を受けた学生の数は多く、また関西大学地理出身で研究・教育職に就いた学生数では高橋先生のゼミの出身者が多数であることなどは、先生が教育者としても一流であることを端的に物語っている。

私にとって高橋先生は大学時代からの五学年以上の身近な先輩であり、高橋さんには長きにわたり随分とお世話になった。先生は私も教室メンバーが病院にお見舞いに行くことを最後まで固辞された。そのお陰で有り難いことに、教員、卒業生、学生、いづれもが、高橋先生のお元気な笑顔やご一緒した楽しい時日などしか思い出せないことになる。しかし一方で、この数年高橋ゼミの大学院生が次第に先生を怖がらなくなってきたこと、心残りの表情でお一人ご帰宅されることも多くなったこと、・・・などが脳裏によみがえると、後悔の念に駆られるとともに、やはりとても寂しい気持ちになる。病魔と戦われてきた先生には、無念であったこと、苦しくお辛かったことなど、随分とおありであったに違いない。それらを乗り越えて、最後まで見事に頑張り通された高橋先生には、深甚なる感謝と賛辞を申し上げるとともに、謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

(関西大学文学部教授)